



玉川学園前駅は、学園開校と同時に開設された。これも小原氏の功績。当時の駅舎はモダンな三角屋根だった。  
 ■写真出典「保存版 町田市今昔写真帖(44ページ)」株式会社郷土出版社

## ■ 開拓者の思いが今もなお、息づく町

町田市唯一の学園都市である玉川学園は昭和4年、学園の開校とともに誕生し、昨年80周年を迎えた。学園名を冠する町や駅を持つだけでなく学園が宅地開発まで担ったという数少ない「純学園都市」の玉川学園は、同じく純学園都市の成城学園を築いた実績をもつ小原國芳氏が、美しい丘陵地帯だったこの地に魅せられ第2の開拓地として選んだことが歴史の始まりである。時が経つにつれその成り立ちを知る人はほとんど少なくなっていくが、よく見渡せば町の至るところに今でもその思いが息づいている。

この町の歴史に詳しい2人の人物に話を聞いた。昭和17年、小学6年生の時に静岡から家族とともにこの町に移り、玉川学園で学び、その後学園職員として過ごしてきた元購買部長の内野昭一さんは当時をこう振り返る。「想像していた東京の風景とは違っていたので驚きました。まだ学園関係者数百人しか住んでおらず、お店もないので、学園の職員が注文を受けて町田まで買出しに行っていたんです。各家庭への新聞配達なんかも学園が引き受けていました」。小原氏はじめ20数人の移住でスタートを切ったこの町は学園の生徒や教員が増える毎に徐々に住民数を増やしたが、一般の人が移り住み、

# 町田の今・昔 ～玉川学園～



玉川という名の由来は「多摩川」。子どもが書きやすいよう漢字を変更したともいわれている。

町らしくなってきたのは戦後、昭和30年あたりからだだったという。その理由は、「環境が良く、学校もある」ことだった。そして後に文教地区となり、人気はさらに高まっていく。小原氏の描いた理想郷は20年余を経て、ようやく形になり始めた。

一般の人が移り住むようになり、駅前周辺にお店も少しずつ増えはじめた。浅井敏男さんはその頃、昭和29年に小学5年生で移ってきた。町田で靴職人の技術を学んだ父親が、靴屋を開業したことがきっかけだった。現在も靴屋「きやろつと」の店主として、北口商店街で営業を続けている。商売柄、住民と顔を合わせる機会が多い浅井さんに当時と今の住民について聞くと、「この町には、ここで初めて居を構えた人が多い。だから昔も今も、この町を一緒に築いたという仲間意識をみんなが持っているのは変わらない」。以前は夜になると、顔が分からなくとも行き交う人に声をかける習慣もあったという。町の安全を守

ることもこうして、ひとりひとりの意識で自然となされた。人口が増えていっても、住み良い町であることが変わることにはなかった。

通常は「住み良い町＝便利な町」、こんな公式が成り立つ。そう考えると玉川学園は、各駅停車のみの小田急線、学園の広大な敷地が中心にあるため幹線道路ができない、等、交通面ひとつをとっても決して便利な町とはいえないはずだ。しかし「この町が目的地ではない、通り過ぎるだけの車や人が来ないことで守られるものもある。道路も拡張されないから、緑が減ることもない」。住人を代表する2人は、これをむしろ利点だと言った。また今どき珍しく、個人経営店が多く残っていることもこの町の特徴。したがって10年や20年ではほぼ、町の景観が変わることはない。そんなところもきつと、今は亡き小原氏の理想だけに違いない。



浅井敏男さん(左)と内野昭一さん(右)。

■参考文献「我がまち 玉川学園地域80年のあゆみ」玉川学園町内会